

「ほど」構文の解釈と主文の有界性について

——述語動詞句の動詞分類を中心に——

井本 亮

キーワード：「ほど」、解釈可能性、有界性、
内部構造、boundedness、動詞分類

要 旨

本稿は、「部屋に入りきらないほど本があった」「手が赤くなるほど壁を叩いた」など、「ほど」が構成する副詞的修飾成分を含んだ構文(以下、「ほど」構文と呼ぶ)の意味解釈の原理を明らかにすることを目的とする。本稿では Jackendoff (1992)で提示された有界性と内部構造という概念が動詞句の限界性から名詞句の定/不定に至る汎範疇的概念素性であることを援用し、それが「ほど」構文に伴う解釈可能性の説明に有効であることを示す。また、動詞クラスおよび主文中の名詞句が持つ有界性が、「ほど」構文の解釈と相関することを示す。そして、「ほど」構文の解釈可能性が、主文事象の有界性の計算によって統一的に導かれることを明らかにする。本稿の結論は、「ほど」構文の解釈原理を理論的に説明することを得ると同時に、より一般的な副詞的修飾成分と動詞との共起関係の考察に関する接近法をも示唆するものである。

0. はじめに

奥津(1975b、1980a、1986)は、「ほど」を形式副詞として捉え、程度副詞句を構成する主要部とした。(1)はその例である。

- (1) a. これにはさすがの西園寺が きんたまのでんぐり返る ほど びっくりし……。
- b. 七朝を続けて手紙は来たりけり、読み惑う ほど 目は老いにけり。
- c. 死ぬ ほどに 疲れた。
- d. 弾丸が6発あたっても死なない ほど 頑健だった。

(奥津 1986:55(6)1-3、(7))

しかし、井本(1999a、1999b)などで例証されたように、奥津のいう程度の形式副詞「ほ

ど」には数量詞句の連用用法もしくは量副詞句としての用法も認められる。(2)がその例である。

- (2) a. おなかを壊すほどアイスクリームを食べた。
- b. 屋根が落ちるほど見物客が登った。
- c. 手が赤くなるほど壁を叩いた。
- d. 身体を壊すほど働いた。 (井本 1999b:60(1))

このように考えると、形式副詞「ほど」を、述語の程度性を修飾する形式副詞としてのみ捉えることはその用法の一面を捉えたにすぎないということになる。なぜならば、「ほど」とそれに先行する補足成分によって構成される副詞句(以下、これを「ほど」節と呼ぶ)が程度副詞として機能するか量副詞として機能するかという判断は、述部が含意する「程度性」あるいは「数量性」に依存していると考えられるからである。例えば、述部にいわゆる程度述語が現れた文では、「ほど」節はすべて奥津のいう「非常の程度」を表わす^{*1}((1))。然るに、程度性を含むと考えにくい均質な運動様態を表す動詞句が述部に現れる時には、「ほど」節は名詞句の数量・運動量・時間量といった要素の数量性を表す。

- (3) a. おなかを壊すほどアイスクリームを食べた。(=(1a)) [アイスクリームの量]
- b. 屋根が落ちるほど見物客が登った。(=(1b)) [見物客の数]
- c. 手が赤くなるほど壁を叩いた。(=(1c)) [壁を叩いた回数]
- d. 身体を壊すほど働いた。(=(1d)) [働いた時間]

さらに、「ほど」節には次の(4)のように、1回の動作の様態的側面を修飾すると考えられる解釈もある。

- (4) a. 天井に頭をぶつけるほどジャンプした。
- b. 血がにじむほど腕を噛んだ。
- c. ドレスが破れるほど引っ張った。

このように、「ほど」節が程度副詞句なのか量副詞句なのか、あるいは様態副詞句なのかという分類法的考察は、結局のところ、「主文の述部に現れた要素がどのような性質を含意しているか」という問題に帰着するといえる。換言すれば、「ほど」節がどのような副詞句なのかということを議論するよりも、「ほど」節は、主文の述部との関係性のもとに、どのような解釈(程度性を修飾するか、数量性を修飾するか)を得るかにつ

いて検討すべきであると考えられる。

本稿では、このような動機付けのもとに、主文の述部に現れた要素と「ほど」節の解釈との関係性を考察することを目的とする。特に本稿では主文の述部が動詞句である例を検討し、動詞句の素性によって「ほど」節の解釈が分岐することを示す。結論を先取りすれば、「ほど」節の解釈は、分類的には述部の動詞句がどの動詞クラスに属するかに関連しており、概念的には動詞句の有界性(boundedness)に依存している。

本稿は、以下のような構成をとる。まず第1節において、本稿が取り上げる「ほど」節を含んだ構文、およびそれに伴う解釈可能性および名称を規定する。第2節では、「有界性」という概念について、Jackendoff(1992)を概観し、後に検討する動詞クラスと「ほど」節の解釈に関する議論の焦点を定める。第3節では、動詞クラスとしてLevin(1993)を援用し、対応する日本語の動詞クラスと「ほど」節の解釈を検討する。第4節で、それまでの議論のまとめを行う。

1. 考察対象となる構文について

1.1. 構文の規定

本節では、まず、本稿の考察対象となる「ほど」節を含む構文を規定しておきたい。それは次に規定するようなものである。

- I : 本稿において考察の対象となるものは、[[動詞句1ほど] 動詞句2]という構造をなす文である*2。
- II : 本稿ではIに相当する文を「「ほど」構文」と呼ぶ。
- III: 動詞句1は統語的には「ほど」の構成する句に従属する要素であり、この[動詞句1ほど]の部分「「ほど」節」と呼ぶ。
- IV: 「ほど」節において「ほど」の先行詞となる部分を「補部」と呼ぶ。

Iは形式副詞句を含む文のうち、形式副詞が伴う補足成分および主文の述部が動詞句であるものに制限することを示す。したがって、「呆れるほど頑丈だ」のような形容詞述語文や「山ほど食べた」のような[名詞句+「ほど」]のような副詞句は考察対象としない。また、「目が回るほどのスピード」のような[[「ほど」節+「の」+NP]の形式や「その地面はあまりに固くて、スコップの刃が折れるほどだった」のような[S+「ほど」節+「だ」といった形式は本稿では取り上げない*3。また、II～IIIに規定した名称は筆者によるものである。特に「ほど」構文という名称については、そのほかの用法を鑑みると、まだ再考の余地があるといえるが、「ほど」節は単に副詞句として機能するだけでなく、主文全体の解釈に関与するという仮説からこのような名称を与えた。

1.2. 「ほど」構文の解釈可能性

前節で規定した「ほど」構文では、「ほど」節は程度副詞句としてだけではなく、量副詞句やときに様態副詞句としての解釈も導く。その解釈は、その指示対象に関してさらに細かく分類することができる。この複数の解釈可能性は、本稿の考察に大きく関与するので、ここであらかじめ例示しておきたい。

1.2.1. [目的語が大量]

- (5) a. おなかを壊すほどアイスクリームを食べた。
- b. 立てなくなるほど酒を飲んだ。
- c. ペンだこができるほど手紙を書いた。

「ほど」構文において、「ほど」節が主文の目的語位置名詞句の数量を指示することができる。(5)はその例である。(5a)では「アイスクリーム」、(5b)では「酒」、以下、(5c)「手紙」の数量がそれぞれとても多いという解釈を伴う^{*4}。そこで、このような解釈を[目的語が大量]と呼ぶことにする。

1.2.2. [主語が大量]

- (6) a. 庭を埋め尽くすほど花が咲いた。
- b. 遊覧船が沈むほど客が乗った。
- c. 先の戦争で、数え切れないほど人が死んだ。

(6a)では「花」の数量、(6b)では「客」、(6c)では「人」の数量がそれぞれ多いという解釈を伴う。このように、「ほど」節が主文の主語位置名詞句の数量を指示する解釈を[主語が大量]と呼ぶことにする。

1.2.3. [事象回数が大量]

- (7) a. 背中が赤くなるほど次郎を叩いた。
- b. ペンキが剥げるほど壁をこすった。
- c. ドレスが破れるほど引っ搔いた。

(7)の各例は、(5) (6)とは違い、主文が表す事象が繰り返し起こったという解釈を伴う^{*5}。(7a)では「次郎を叩く」、(7b)では「壁をこする」、そして(7c)では「ドレスを引っ搔く」

というそれぞれの事象の回数が連続的で多回的であるという解釈である。こうした多回の事象の解釈を「事象回数が大量」と呼ぶことにする。

1.2.4. [行為の量が大量]

- (8) a. 足がつるほど泳いだ。
- b. 病気になるほど働いた。
- c. タバコを2箱吸い終わるほど友達を待った。

(8)の各例も、個別的な名詞句の数量ではなく、主文が表す事象を修飾する。しかし、このときには繰り返しの読みではなく、1回の動作・行為の量あるいはそれに要する時間の長さを表していると考えられる。すなわち「泳ぐ」(8a)、「働く」(8b)、そして「友達を待つ」(8c)のような事象の動作量や時間を修飾する。このような解釈を「行為の量が大量」と呼ぶことにする。

1.2.5. [非常の程度]

- (9) a. 見違えるほど痩せた。
- b. 起きあがれなくなるほど太った。
- c. 死ぬほど疲れた。

(9)の例では、「ほど」節は特定の名詞句の数量や主文の動作の回数性・動作量といった要素ではなく、主文述部が本来的に備えているであろう程度性を修飾していると考えられる。これはすなわち、奥津が論じた程度の形式副詞「ほど」における「非常の程度」の用法と同様である。よって、これは奥津の術語をそのまま活用し、「非常の程度」と呼ぶことにする。

1.2.6. [1回の強いウゴキ]

- (10) a. 軒先に届くほどジャンプした。
- b. 血がにじむほど嘔んだ。
- c. 背中に手の跡が残るほど叩いた。

(10a-c)の例では、「ほど」節は(7)(8)の各例と同様、主文が表す事象を修飾していると考えられる。しかし、(10)の例には、事象回数や動作量が多いというよりも、主文述部

動詞句が表わす動作が「強く」、あるいは「激しく」行われたという解釈が伴う。したがって、起こった事象の回数は1回であり、動作量あるいは要した時間が多いというわけでもない。(10)に見られる解釈は、事象の数量性というよりは、いわば動作・行為の様態の側面を修飾している点で、先の[事象回数が大量]または[行為の量が大量]とは異なる解釈であると考えられる。そこでこの解釈を[1回の強いウゴキ]と呼ぶことにしたい。

1.2.7. 解釈可能性の分類

以上、1.2.1節から見てきたように、「ほど」構文の解釈には6種類の解釈可能性が考えられる。このうち、[目的語が大量][主語が大量][事象回数が大量][行為の量が大量]の4種の解釈については、これは主文中のある特定の要素または主文が表す事象全体、あるいはそれに伴う動作量や時間の数量性に関連したものと考えられる。一方、[非常の程度]が、数量性というよりはむしろ、程度性に関連した解釈であることは、奥津の一連の論考によって支持されよう。また[1回の強いウゴキ]の読みについても、動作の様態に焦点が当てられていると考えられること、「強く」「激しく」といった動作の様態を表わす自立副詞で意味を補完できることなどから、これは、動作の情態性を修飾していると考えられることができる。

ところで、程度副詞が量副詞的に解釈される用法を持つことは、これまでも多くの指摘がある(川端 1967、仁田 1983、工藤 1983、森山 1985、佐野 1998 など)。よって、「ほど」節を程度副詞の一種として捉えるという立場も考えられる(ただし、どのような環境においてそのような用法的分岐が起こるのかを主眼とした論考は少ない)。しかしながら、先の(10a-c)に見られるような、動詞が表わす動作の情態概念を修飾する用法は程度副詞には認められないこと、「ほど」節が、佐野(1998)が提示した[+限界/進展的变化]動詞句とも共起可能であること(「それで釘が打てるほどバナナが凍った」/「*非常にバナナが凍った」)などから、必ずしも程度副詞の量副詞的用法からだけでは「ほど」節の解釈を説明することはできないと思われる。

また、井本(1999a、1999b)は、「ほど」構文における意味解釈を「ほど」節の数量詞的性質から考察した。「ほど」節が数量詞として指示対象を計量するとき、その計量対象はモノあるいは主文が表す事象である。統語的に言えば、「ほど」節には、連体的に特定の名詞句を指示対象とするNP-quantifierと連用的に動詞句または主文を指示対象とするVP-quantifierの2つのタイプがある。議論の詳細についてはここでは割愛するが、これにより、「ほど」節の解釈はNP-quantifierとしての解釈である[目的語が大量][主語が大量]と、VP-quantifierとしての解釈である[主語が大量][行為の量が大量]に分類される。[非常の程度]と[1回の強いウゴキ]についても、主に動詞句の程度性概念成分や情態性概念成分を修飾することから、後者に分類されると考えられる*6。また、事象を計量対象とするタイプのうち、[事象回数が大量]読みだけは、多回的事象を表す。

以上、程度性／数量性、およびNP-quantifier／VP-quantifierという対立から、「ほど」節の解釈可能性は以下の表1のようにまとめられる。

表1: 「ほど」構文の意味解釈と修飾概念・修飾対象

		修飾対象		
		モノ	事象	
			一回的事象	多回的事象
修飾概念	数量性	[目的語が大量] [主語が大量]	[行為の量が大量]	[事象回数が大量]
	程度性		[非常の程度]	
	情態性		[1回の強いウゴキ]	

本節では、「ほど」構文にどのようなタイプの意味解釈が備わり得るかについて、例文から検討し、分類した。次に問題となるのは、なぜこのような複数の解釈可能性が存在するのか、また、どのような条件のもとにある解釈に確定されるのかという問題である。

前述のように、「ほど」節には数量詞的性質が認められる。そして「ほど」節が数量詞としてふるまうことで、上述した数種の解釈が生じることが説明される。また、一般数量詞と述語動詞句については、これまでも Miyagawa(1989)、影山(1993)、金水(1985)、北原(1994、1996、1997)などが扱っており、そこでは数量詞の指示と動詞の項構造との関係や動詞句の限界性と数量詞の計量機能・計量対象の間の関係性が指摘されている。そこで、「ほど」節を不定の数量詞であると捉えるという視点と、数量詞と動詞句の限界性についての関係性という視点から、「ほど」構文の意味解釈と述語動詞句の限界性との間の関係性を検討するという接近法が考えられることになる。

そこで次節からは、「ほど」構文の解釈原理を考察するための接近法として、動詞クラスと「ほど」構文の解釈との対応を動詞句の限界性に焦点を当てて検討していく。まず、次節では、本稿で援用する限界性に関する概念について概観する。

2. 「有界性」について

前節で、限界性を焦点とすると述べたが、いわゆる「限界(性／点)」という術語については、多くの研究者がそれぞれの視点から用いているのが実情である。近年の動詞研究などでは、「限界性」を「事態(Event)に限界点(terminative point)が存在するかどうか、すなわち事態の終了点の有無について言及するもの」というような規定のもとに使用している。いずれにせよ、「限界(性／点)」などは事象の時間的の局面に関わる概念である

といえる。その意味においては、本稿で焦点とする限界性は、その規定するところに類似している。しかし、本稿では動詞句の限界点だけでなく、文が表す事象全体に関与する名詞句の数性や動詞が表す事象の回数性などにも視点を広げてこれを考えたい。そこで、本稿では、限界性と類似する概念であるが、より汎範疇的な概念である「有界性 (boundedness)」を用いることとする。有界性とは、概念的な境界の有無である。そこで次節では、本稿が拠る Jackendoff (1992) を概観したい。

2.1. Jackendoff (1992)

Jackendoff (1992) は、有界性と内部構造という2つの汎範疇的素性をもとに、物質と事象のもつ概念的意味を還元することを提案した。2つの素性のひとつが有界性 (bounded) で、その値は $[\pm b]$ で表される。有界性は、物質の実体と事象がそれ自身境界を持つかどうかという含意に関する素性である。物質の実体に関して言えば、加算名詞 (例えば an apple: $[+b]$) と集合名詞 (例えば water: $[-b]$) の違いを表す*7。また、事象のアスペクチュアルな限界性も有界性の値の違いで表すことができる。

- (11) a. Bill ran to the store.
- b. Bill slept.
- c. Bill slept until 9:00.

(11a) は、ビルが店に到着した時点で事象は終結するので $[+b]$ と考えられる。(11b) は、そのような事象の終端が示されていないので $[-b]$ となる。ただし、同じ動詞 sleep が表す事象でも (11c) の until 9:00 のように事象の終端が明示されている場合には、 $[+b]$ となるのである。

もうひとつの素性が内部構造 (internal structure) で、その値は $[\pm i]$ によって表される。内部構造は、ある実体がそれ以上の小さな同種の要素に分割可能であるか、言い換えれば境界を持つ要素の集合体であるか否かという違いを表す。例えば a pig は、それ以上同種の要素 (a pig) に分割することができない (豚を切り分けたら、それは豚肉であって豚ではない) から $[-i]$ となり、裸複数名詞 (例えば buses) は、同種の構成要素 (a bus) に分割可能であるから、これは集合体とみなされ、 $[+i]$ の値を持つ。事象も同様の内部構造を持つものとして同様に還元できる。

このように、物質の実体と事象は、有界性と内部構造という2つの素性によって並行的に還元される。

- (12) $+b, -i$: individuals (a pig)
- $+b, +i$: groups (a committee)

-b, -i : substances (water)

-b, +i : aggregates (buses, cattle)

(Jackendoff 1992:20(11))

- (13) a. John ran to the store. [+b, -i]
b. The light flashed until dawn. [+b, +i]
c. John slept. [-b, -i]
d. The light flashed continually. [-b, +i]

(13a)は、ジョンが店に着いた時点で、(13b)は夜明けの時点をもってそれぞれの動作は終結するから[+b]の値を持つ。対して(13c、d)は、明確な終端を持たないので、[-b]である。一方、内部構造では(13a)はto the storeによって終端を持つため、終端の状態とそれまでの経過は性質が異なるので[-i]の値を持つ。また(13c)は均質な事象、すなわち過程(process)を表すので、これも[-i]である。これに対して、(13b、d)では、1回のThe light flashedで表されている事象が繰り返し起こっていると解釈される。このとき1回ずつの発光として事象をさらに分割できるので、内部構造は[+i]となる。

Jackendoffは次のような文を例示し、その解釈と概念構造を問うた。

(14) The light flashed until dawn. (:15(5))

(14)は、光が夜明けまで繰り返し発光していたという読みを持つ。しかし主語はThe lightで単数形であることから、事象が持つ繰り返しの読みは語彙的には現れない。では、どのようなシステムによって、これは繰り返しの事象であると解釈されるのであろうか。

Jackendoffはこのような問題を説明する要素として、解釈規則(rule of construal)の適用を提案する。これは不正な形式における概念の矛盾・衝突を回避するための規則である。また、名詞や事象がもつ有界性と内部構造の値を[-]から[+]へ、またその逆に変換する関数を導入した。その関数群は大きく2つの機能に分けられる。ひとつは、その項を下位的実体として含む実体へ位置付ける「包含関数(Including functions)」で、包含関数には、複数化([+b, -i]→[-b, +i])をもたらすPL(plural)、構成物を示すCOMP(composed)、包含関係を示すCONT(containing)の3つがある。もうひとつのタイプが、その項によって示されるより大きな実体の下位的実体へ位置付ける「抽出関数(Extracting functions)」である。これにもPL、COMP、CONTに対応する3つがあり、それぞれELT(element)、GR(grinder)、PART(partitive)と呼ばれる。

こうした関数は、語彙自身が含んでいる場合と、解釈規則からの計算によって導出される場合がある。先の(14)の例でいうと、事象の核となる意味LIGHT FLASHは[+b, -i]

という素性を持つ。そしてUNTILというのは、時間（および事象）によって事象を有界づける（境界を与える）機能を持つ。しかしながら、LIGHT FLASHという事象は点的事象であるから、それ自身すでに境界を持っている。境界を持つ項の外にさらに境界を与えることはできない。そこで解釈規則が適用され、不正な形式を回避するためにPL関数が導入される。これによってLIGHT FLASH [+b, -i]は、[PL([LIGHT FLASH])]として[-b, +i]の素性に変換され、UNTILによる時間的有界づけを受けることができるのである。繰返しを読みを持つ事象はこのようにして構造化される。次の(15)は有界性と内部構造の素性および関数とによって表された(14)の例の形式化である*8。

(15) The light flashed until dawn. (= (14))

$$\left[\begin{array}{c} \text{UNTIL} \left(\left[\begin{array}{c} \text{PLURAL} \left(\left[\begin{array}{c} \text{LIGHT FLASHED} \\ \text{Event BOUNDED} \end{array} \right] \right) \\ \text{Event UNBOUNDED} \end{array} \right] \right), \left[\begin{array}{c} \text{Time DAWN} \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \text{Event BOUNDED} \end{array} \right]$$

(Jackendoff 1992:18(8))

2.2. 有界性と数量詞の解釈

Jackendoff(1992)によってもたらされた2つの素性と数種の意味関数は、日本語の一般数量詞や「ほど」節を捉える際に大きく寄与する。ここでは「ほど」構文に適用する前に、一般数量詞への適用例として、北原(1996)の内容数量詞の例を検討したい。

(16) a. *豚を 200g 殺した。 (北原 1996:36(39a))

b. 豚を 5 トン 殺した。 (同:37(40))

(17) ウイルス 200g を殺した。 (同:37(39b))

(16)の適格性を考えてみよう。「1匹の豚」は個体であるから、その素性は[+b, -i]である。経験的知識によって、「200g」は1匹の豚の値より小さい値であると解釈される。しかし、1匹の豚の内部構造は[-i]だから、これ以上小さな値に分割することはできない。「200g」が複数の豚を計量した値とは経験的知識から考えられない。よって(16a)は不適格となる。また「5トン」は豚1匹の数量とは解釈できない。これも経験的知識と衝突してしまう。そこで、解釈規則が適用され、複数に変換するPLが導入され、「豚」は少なくとも個体ではなく、集合であると解釈される。そして豚(集合)は、[-b, +i]という素性を持つ。

- (18) a. 豚(個体): [+b, -i]
b. 豚(集合): $\left[\begin{array}{l} -b, +i \\ \text{PL}([\text{豚 } +b, -i]) \end{array} \right]$

[+i]という内部構造の素性であれば、それをひとまとまりにして総計的に軽量することが許されるので(16b)は適格なのであると考えられる。(17)では、「ウイルス」の素性はすでに[-b, +i]と解釈されていると思われるので、そのまま適格となる。北原が展開する議論もほぼ同様であるが*9、[±b, ±i]という素性とPL関数の適用という手法によってより形式的に説明することができるのである。

この有界性と内部構造の素性による説明をさらにおし進めると、(16b)文では、[-b, +i]である計量対象(豚(複数))に境界を与えているともいえる。なぜなら、「豚(複数)を殺した」という事象(繰返し読み: [-b, +i])は、「5トン」という数量詞が表す数量に達した時点で終結する。つまり数量詞「5トン」は、事象「豚を殺した」を測定しているといえる。つまり、「豚を5トン殺した」は数量詞「5トン」によって、[+b, +i]という素性を持つことになるのである。よって、内容数量詞は非有界的事象に境界を与える機能を有しており、これは Tenny(1994)のいう Measuring-out に相当する。

また、鈴木(1997)も論じているように、「たくさん」は、本来的に方向を持つ動詞(行く、来る、乗る、など)と共起したとき、主語の数量と事象回数を描写する。その解釈の違いは主語位置の名詞句の複数性に起因する。

- (19) a. 日本人がたくさんハワイへ行った。=ハワイへ行った人がたくさん
b. 私はたくさんハワイへ行った。=ハワイへ行った回数がたくさん
(鈴木1997:13(25))

これも「日本人」が[-b, +i]、「私」が[+b, -i]という素性を持つことから説明される。「たくさん」の持つ複数の含意は[-b, +i]の素性を持つ「日本人」と整合するが、[+b, -i]の素性を持つ「私」とは整合しない。そこで、「たくさん」は主語である「私」ではなく、事象の複数読みを要求することになる*10。

このように、Jackendoffの提案した有界性と内部構造という2つの素性は、動詞や名詞といった語彙のレベルでの有界性から文全体が表す事象の有界性、さらには数量詞の機能や解釈についても有用な概念であるといえる。これはすなわち、「ほど」節が数量詞的機能を備え(つまり、述部の動詞句だけでなく指示対象となる名詞句の数性もその解釈に影響する)、また述部が「ほど」構文の解釈に関与するという事実が、有界性に関する形式化によって、統一的に一般化されうることを示唆している。

本節では、「ほど」構文の意味解釈と主文述部動詞句との対応関係を考察する際の焦

点として、有界性という概念を用いること、それは動詞句の限界性だけでなく、名詞句の数性も同様に捉えることができること、の2点を示すために Jackendoff の議論を概観した。次節では、動詞句の分類としてもちいる動詞クラスを紹介し、それと「ほど」構文およびその解釈との対応関係を考察していく。

3. 「ほど」構文の解釈と動詞クラスとの対応

本節では Levin(1993) および Levin and Rappaport Hovav(1995) による動詞の意味クラスをもとに、「ほど」節の意味解釈と主文動詞の対応を考察する。

3.1. 動詞の意味クラス—Levin(1993) および Levin and Rappaport Hovav(1995)

本節では、先行研究における動詞分類をもとに「ほど」構文の解釈と主文動詞の意味との対応を考察する。動詞分類は日本語動詞では金田一(1950)、英語では Vendler(1967) などいくつかあるが、これらを採用しない理由は、これらが提示した分類では「ほど」構文の解釈の分布までは捉えきれないからである。

ただし、Levin(1993) が示した動詞のクラスが必ずしも日本語動詞の分類に適切に適用されるとは限らないし、どの動詞分類が最も妥当であるかは一概には決定できない。しかし、本稿は日本語動詞の分類を行うことが主眼ではないし、本節の目的も「ほど」節の読みが主文動詞との概念的意味に対応しているということを示すことであるから、全ての動詞クラスを包含しているわけではないことを諒解されたい。今回は、複数の研究者が提示した異なる視点からの動詞分類を恣意的に援用するよりもむしろ、ひとつの動詞分類体系を一律に用いることに重きをおき、Levin(1993) およびその延長にある Levin and Rappaport Hovav(1995) の動詞分類を用いることにした。

Levin(1993) は英語動詞の統語的ふるまい(alternation)と意味的特徴という観点から、膨大な動詞を48種(下位分類だと192種)の意味クラスに分類した。これだけ詳細に動詞を分類した研究は少なく、それが本稿でLevin(1993)の動詞クラスを援用する理由のひとつである。また、前節で述べたように、本稿ではJackendoff(1992)に基づく有界性の概念を考察の理論的支柱として用いるため、動詞のアスペクチュアリティに拠らないLevin(1993)、およびLevin and Rappaport Hovav(1995)の分類を用いることにした。

本稿で観察する動詞のクラスは次ページの表2に挙げる14種類である。その選択にあたっては、本稿の考察に寄与する先行研究から、影山(1993, 1996)や鈴木(1997)、北原(1994)、Jackendoff(1991, 1996)などが取り上げた動詞クラスを中心に取り上げた*11。

では、上記の各クラスに属す動詞が「ほど」構文の主文述部動詞句として現れたとき、「ほど」構文はどのような解釈を得るのであろうか。次節より、「ほど」構文の例を観察していく。

表2：本稿で取り上げる動詞クラスと含まれる動詞の例

動詞クラス	英語動詞	日本語動詞
Verbs of inherently directed motion (本来的に方向を持つ動詞)	arrive, come, enter, exit, fall, go, leave, return, rise, etc.	行く、来る、入る、出る、落ちる、乗る、去る、戻る、上がる など
Verbs of manner of motion (運動様態動詞)	bounce, drop, float, glide, move, roll, slide, turn, etc.	はずむ、浮かぶ、滑る、転がる、回る、スピンする など
Agentive verbs of manner of motion (主体的運動様態動詞)	climb, crawl, hurry, jump, march, roll, run, slide, skip, swim, travel, walk, etc.	走る、歩く、滑る、泳ぐ、勉強する、働く、ジャンプする、登る、這う など
Verbs of existence and appearance (存在出現動詞)	exist, extend, live, remain, stay, survive, wait, etc.	いる、ある、存在する、伸びる、生きる、留まる、待つ、残る、生き残る など
Verbs of disappearance (消滅動詞)	die, disappear, perish, vanish, etc.	死ぬ、消える、滅びる、なくなる など
Externally caused verbs of change of state (外的作用状態変化動詞)	break, crash, smash, tear, bend, fold, bake, boil, cook, fry, awake, burn, change, close, expand, fill, increase, melt, sink, tire, clean, thin, blacken, fatten, strengthen, purify, equalize, accelerate, operate, etc.	壊す、裂く、割る、曲げる、折りたたむ、焼く、燃やす、ゆでる、伸ばす、変える、閉める、開ける、満たす、増やす、減らす、固める、溶かす、沈める など
Internally caused verbs of change of state (内的作用状態変化動詞)	burn, decay, molt, rot, swell, etc.	燃える、咲く、腐る、痩せる、太る、疲れる、固まる、溶ける、沈む、伸びる、膨らむ、発酵する、生え変わる など
Verbs of change of possession (所有変化動詞)	buy, sell, get, give, borrow, lent, collect, distribute, etc.	買う、売る、与える、もらう、借りる、貸す、集める、配る など
Verbs of contact by impact (接触衝撃動詞)	beat, hammer, hit, kick, slap, strike, bite, punch, scratch, shoot spank, etc.	ぶつ、叩く、蹴る、打つ、当たる、噛む、殴る、搔く、撃つ など
Verbs of contact (接触動詞)	graze, kiss, lick, stroke, touch, etc.	触る、かする、キスする、なめる、なでる など
Verbs of creation and transformation (創作変形動詞)	bake, make, build, work, sing, dance, wash, cook, compose, construct, knit, etc.	作る、建てる、働く、歌う、書く、洗う、料理する、編む、建設するなど
Psych-verbs (心理動詞)	amuse, anger, bore, please, terrify, worry, enjoy, like, love, disdain, envy, fear, regret, etc.	喜ぶ、怒る、退屈する、楽しむ、怖がる、心配する、好く、愛する、軽蔑する、羨む、怖れる、悔やむ、驚く など
Verbs of ingesting (摂取動詞)	drink, eat, chew, gobble, swallow, consume, ingest, gorge, etc.	食べる、飲む、噛む、呑みこむ、摂取するなど
Verbs involving the body (身体関与動詞)	belch, hiccup, sneeze, snore, wheeze, yawn, cry, bleed, laugh, etc.	げっぷする、しゃっくりする、くしゃみする、あくびする、いびきをかき、血が出る、笑う、泣く など

3.2. 動詞クラスと「ほど」節の解釈

以下に、前節で挙げた各動詞クラスに属す動詞が主文動詞位置に現れた「ほど」構文を例示する。中にはいくつかは適格性の低い文もある。文の左側には可能と思われる「ほど」節の解釈を示した。また、[±b, ±i]の素性を用いながら、なぜそのような解釈が得られるか、不適格なものとはなぜそのように判断されるかについて、各動詞クラスごとに考察する。

3.2.1. 本来的に方向を持つ動詞

- | | |
|--------------------------|-----------|
| (20) 屋根が落ちるほど見物客が屋根に上った。 | [主語が大量] |
| (21) 船が沈むほど人が船に乗りこんだ。 | [主語が大量] |
| (22) 会場が満員になるほど人が来た。 | [主語が大量] |
| (23) 数え切れないほど太郎は富士山に登った。 | [事象回数が大量] |

本来的に方向を持つ動詞は、着点を持つ。概念構造でいえばPath関数TOが含まれている。よって、有界性の値は[+b]である。そして、このクラスと共起した「ほど」節は[主語が大量]か[事象回数が大量]という読みになる。2つの読みが出ることは鈴木(1997)が既に指摘している。そして、この解釈の違いは主文の主語の数性に起因していると考えられる(上例(19)参照)。どちらも事象の回数は複数であるが、主文の主語が[-b, +i]という素性を持つときには事象の素性と整合して主語が複数であるという読みがでる。主語の解釈が[+b, -i]しか許されないときは、事象の複数回しか意味しないので、[事象回数が大量]の読みとなる。なお、これも鈴木が分析しているが、「登る」が主体的運動様態動詞として用いられている場合には、「ほど」節は[行為の量が大量]を表す(鈴木1997:24-25)。

3.2.3. 運動様態動詞

- | | |
|------------------------|------------|
| (24) 数え切れないほどボールがはずんだ。 | [事象回数が大量] |
| (25) 目が回るほどコマが回った。 | [事象回数が大量] |
| (26) 天井にあたるほどボールがはずんだ。 | [1回の強いウゴキ] |
| (27) 床に穴があくほどスピンした。 | [1回の強いウゴキ] |

[事象回数が大量]の読みがでるとき、運動様態動詞が表す事象は[-b, +i]の素性を持つ。「はずむ」は概略、「物体が地面から離れて空中に浮き、再び地面に落ちる」というような意味を表すと考えられる。よって、「1回はずんだ」は[+b, -i]という素性を持つと考

えられる。

また「はずむ」では、(26)(27)のように「1回強く(大きく)はずんだ」という[1回の強いウゴキ]読みを伴うこともある。「はずむ」が表す「空中を上昇/下降している」局面を焦点化すれば、それは過程として捉えられる。これはJackendoff(1987c)が、temporal tier(時間層)の構造におけるP(時間点)とR(時間域)の関係において、時間点Pは、時間域Rを挟んだPRPという構造へ「ズームアウト」されうると論じたことも傍証となる。つまり[1回の強いウゴキ]は運動様態動詞の持つ時間域Rに伴う動作の情態的側面を前景化していると考えられる。このときに[事象回数が大量]読みが出ないのは、多回的事象における有界性が後景化しているためと思われる。

[事象回数が大量]読みを伴うことは、「はずんでいる」のように進行アスペクト形式を伴うときに「繰り返しはずむ状態が続く」と解釈されることからわかる。つまり、[事象回数が大量]の読みを伴う「はずむ」はPLによって[+b, -i]が[-b, +i]に変換されていると考えられる。

3.2.4. 主体的運動様態動詞

- | | |
|---------------------------------------|------------|
| (28) 足がつるほど泳いだ。 | [行為の量が大量] |
| (29) 足にマメができるほど歩いた。 | [行為の量が大量] |
| (30) 足がつるほどジャンプした。 | [事象回数が大量] |
| (31) ホノルルマラソンでは、現地の人がうんざりするほど日本人が走った。 | [主語が大量] |
| (32) 天井に届くほどジャンプした。 | [1回の強いウゴキ] |

主体的運動様態動詞は[-b, -i]という有界性と内部構造を持つ^{*12}。したがって、一般的には[事象回数が大量]という読みは出ない。[-b, -i]の事象を計量するということは、均質的な内容全体を総計して境界を与える働きをすることである。なぜなら、内部分割不可能な対象を個別的に計量することはできないからである。井本(1999a)で、[行為の量が大量]は期間数量詞と並行的な機能を持つとされたが、これは事象の内容量を計量するものであった。よって、主体的運動様態動詞と共起した「ほど」節が[行為の量が大量]という読みを持つことが説明される。

(30)で[事象回数が大量]の読みが出るのは、「ジャンプする」という動作が、空間移動の含意の有無に関わらず着点を持つ(ジャンプしたら必ずどこかへ着地して、事象が終結する)ため、有界的事象として複数化が可能であるからと考えられる。また、(32)が[1回の強いウゴキ]読みを伴うことは、先の(27)で見たような[様態的側面の前景化・有界性の後景化]と同様の説明が与えられる。

そしてもうひとつ重要なことは、(31)のように主文の主語位置に現れる名詞句が[-b, +i]の素性を持つときには[主語が大量]という読みも可能であるという点である*13。これは、「ほど」節の解釈が動詞の項構造だけに依存するわけではないということを示唆している。もちろん、主体的運動様態動詞が非能格自動詞であり、それが[行為の量が大量]読みに関連していることは事実であるが、主文が表す事象全体を考えたとき、解釈決定の要素はそれだけではないということになる。

3.2.5. 存在出現動詞

- (33) うんざりするほど行楽客がいた。 [主語が大量]
 (34) 10年かけても読みきれないほど本があった。 [主語が大量]
 (35) 食べきれないほど料理が残った。 [主語が大量]
 (36) 視界をさえぎるほどイナゴが発生した。 [主語が大量]
 (37) 持っていた本を読み終えるほど待った。 [行為の量が大量]

「いる」「ある」「残る」などの存在動詞では「待つ」以外、すべて[主語が大量]という読みになる。事象の素性は[-b, -i]である。存在の終結点は含意されないし、時間構造も持たないからである。「発生する」「現れる」などの出現動詞は事象の始発点を含むのでその有界性は[+b]である。したがって、「ほど」節による事象の複数化は、本来的方向性を持つ動詞と並行的であるといえる。いずれにせよ、存在出現動詞の主語はみな[-b, +i]の素性、つまり境界を持たない集合として解釈される。定名詞句([+b, -i])はこのクラスの「ほど」構文における主語になれないか、仮に可能であるとしてもまたは後述するような「待つ」のように、[行為の量が大量]読み——ここでは、存在する時間が大量——になる。

- (38) *10年かけても読みきれないほど本が一冊あった。
 (39) うんざりするほど客が1人いた。(コーヒー一杯で何時間もねばられたとき)

(38)の不適合性はVP-quantifierである「ほど」節が複数回事象の読みを要求するという性質から説明される*14。日本語名詞における数的な定／不定の形態的標示は文法的な要件ではないので、それが定([+b])か不定([-b])かは、語彙的な情報に本来的に依存していると考えられる。

Levin and Rappaport Hovav (1995)は「wait(待つ)」を存在動詞として捉えているが、他の動詞と異なる点はその意志性にあると考えられる。Jackendoff (1990)の形式化に従えば、「待つ」の概念構造は次のようになると思われる。

(40) Xが^s(Yで)待つ：

$$\left[\begin{array}{l} \text{STAY} ([_{\text{Thing}} \alpha], [_{\text{Place IN}} ([_{\text{Thing}} Y])]) \\ \text{Event AFF} ([X]^\alpha) \end{array} \right]$$

意志性という観点から見ると、「待つ」は主体的運動様態動詞的であり、[行為の量が大量]という読みが出ることも予測されることである。また、一般的な主体的運動様態動詞とは異なり、その計量系が時間だけであることも特徴的である。これは主体的運動様態動詞の「働く」なども同様である。

3.2.6. 消滅動詞

- (41) 数え切れないほど死んだ。 [主語が大量]
 (42) 数え切れないほど文明が減びた。 [主語が大量]
 (43) 数え切れないほど備品がなくなった。 [主語が大量]
 (44) 数え切れないほど備品をなくした。 [目的語が大量]

消滅動詞とともに現れる「ほど」節は、自動詞に関してはすべて[主語が大量]、「なくす」のような他動詞では[目的語が大量]の読みになる。消滅動詞は影山の非対格自動詞に関する分析通りであるといえる。消滅動詞は消滅をもって事象が終結するので、その素性は[+b, -i]であると考えられる。なお、消滅動詞は有界の事象を表すのに、[事象回数が大量]読みが出ないのは、消滅動詞クラスの動詞が含意する不可逆性と連続的多次の事象が衝突するためではないかと考えられる。

3.2.7. 外的作用状態変化動詞

- (45) クタクタになるほど花瓶を壊した。 [事象回数が大量]
 (46) 手にマメがができるほど薪を割った。 [事象回数が大量]
 (47) 斧が折れるほど薪を割った。 [事象回数が大量]
 (48)* 真っ二つになるほど瓦を割った。

外的作用状態変化動詞では、「ほど」節は[事象回数が大量]に限られる。つまり事象が1回の状態変化事象[+b, -i]が複数化した[-b, +i]という素性を持つことが条件となる。これは北原(1996)が示した制約およびIshii(1998)が提示したVP-quantifierに関する意味的制約にしたがっている。(48)が非文と判断される理由はいくつか考えられるが、そのひとつは「ほど」節が表す事象「真っ二つになる」が「こなごなになる」などと違い、

1回の外的作用でしか得られない変化であるために、複数回の事象という含意を許さないためであると考えられる。つまりこれは、「ほど」節がVP-quantifierと限界動詞の意味制約に違反している事例であるといえる。

3.2.8. 内的作用状態変化動詞

- | | |
|--------------------------|---------|
| (49) 見違えるほど瘦せた。 | [非常の程度] |
| (50) 立ちあがれなくなるほど疲れた。 | [非常の程度] |
| (51) レールが伸びるほど気温が上がった。 | [非常の程度] |
| (52) 部屋に入らなくなるほど風船が膨らんだ。 | [非常の程度] |
| (53) 庭が赤く染まるほど花が咲いた。 | [主語が大量] |
| (54) *手が赤くなるほど花瓶が壊れた。 | |
| (55) *数え切れないほど太った。 | |

内的作用状態変化動詞は Levin and Rappaport Hovav が、非主体的な内在性コントロールを含意する動詞と捉えた動詞である(Levin and Rappaport Hovav(1995:91))。これらと共に「ほど」節は奥津が提示した[非常の程度]を表す。また、北原(1994)が提示した「変動量」もこれに相当する。つまり事象の状態変化の量を描写するのである。また、外的作用状態変化動詞において得られた[事象回数が大量]という読みは出てこない。(54)(55)のように、「ほど」節が「数え切れないほど」のときは非文になる。その理由は定かではないが、状態変化の「変動量」が非加算の計量であることと無関係ではないかもしれない。つまり、[事象回数が大量]という読みは「ほど」節が個体数量詞として機能することが背景にあるが、「変動量」を個体数量として計量することは不可能であると考えられる。(53)の「咲く」と共起したときだけ[主語が大量]という読みを得る。これは変動量を含意はするものの(「五分咲き、七分咲き」などが可能)、それは有標で、むしろ花の出現を第一に表すためではないかと考えられる^{*15}。つまり、「ほど」節は変動量よりも出現動詞のように主語を計量することになる。よって、[-b, +i]の素性を持つ「花(複数)」との計算から、[主語が大量]の読みになると考えられる。

3.2.9. 所有変化動詞

- | | |
|-----------------------|----------|
| (56) 一度に運べないほど本を買った。 | [目的語が大量] |
| (57) 在庫がなくなるほど商品を売った。 | [目的語が大量] |
| (58) 破産するほど骨董品を集めた。 | [目的語が大量] |

所有変化動詞は典型的な他動詞における数量詞解釈を取る。すなわち、「ほど」節はすべ

て[目的語が大量]という読みになる。所有変化動詞が表す事象の有界性は[+b]である。Jackendoff(1990)は、EXCH という関数によって、所有変化事象を形式化した。

(59) Bill bought the book from Sue.

$$\left[\begin{array}{l} \text{GO}_{\text{Poss}}([\text{BOOK}], [\text{FROM}([\text{SUE})], \\ \text{TO}([\text{BILL})]]) \\ \left[\text{EXCH} [\text{GO}_{\text{Poss}}([\text{MONEY}], [\text{FROM}([\text{BILL})], \\ \text{TO}([\text{SUE})]])] \right] \end{array} \right]$$

(Jackendoff 1990:62(6))

このように、所有変化動詞の概念構造には対象物と MONEY (buy の語彙概念構造における Theme の初期値)の移動について TO と FROM という Path 関数を含むので、境界を持っていると捉えることができる。有界的でありながら[事象回数が大量]読みが出ないのは、次節の接触衝撃動詞クラスの例とは異なり、有界的事象の複数化は事象における対象物の数量と常に同期的であるという特徴があるためと、それと数量詞の指示対象に関する一般原則とが整合的に解釈されるためであると考えられる。

3.2.10. 接触衝撃動詞

- | | |
|------------------------|------------|
| (60) 手が赤くなるほど叩いた。 | [事象回数が大量] |
| (61) 肋骨が折れるほど蹴った。 | [事象回数が大量] |
| (62) あざができるほどボールが当たった。 | [事象回数が大量] |
| (63) 血がにじむほど噛んだ。 | [1回の強いウゴキ] |

接触衝撃動詞では、「ほど」節は一般的に[事象回数が大量]の読みになる。つまり事象の素性は[-b, +i]である。ただし、接触衝撃動詞のいくつか(例えば「叩く」「蹴る」「噛む」など)は、動詞自身にその回数性が指定されていない(国立国語研究所 1972:309)、つまり1回叩いたのか複数回叩いたのかは、語彙的に*¹⁶二義的なので、[1回の強いウゴキ]という読みが出ることがある。そのときには[+b, -i]という素性を持ち、1回の接触に伴う衝撃度・働きかけ性に言及していると考えられる。つまり、外的作用状態変化動詞などとは異なり、事象の複数回という含意は語彙的に含まれているものである。

3.2.11. 接触動詞

- | | |
|-------------------|-----------|
| (64) 数え切れないほど触った。 | [事象回数が大量] |
| (65) 舌がしびれるほど舐めた。 | [事象回数が大量] |

- (66) 手垢がつくほど花瓶をなでた。 [事象回数が大量]
 (67) * あざができるほど触った。

接触動詞は接触衝撃動詞と異なり、対象に対する働きかけが弱いか、ほとんどないと考えられる((67)が非文になるのはそれが原因であると考えられる)*17。したがって[1回の強いウゴキ]という読みは現れない。ただし、1回の動作(触ること)が、持続して行われているという解釈をとれるときには、時間という観点で、[行為の量が大量]ということもできる。接触動詞は着点を持つので[+b, -i]といえるが、動詞が第一義に表すのは[移動]よりもむしろ着点に到達した後の結果状態であると考えられるからである。ただし、そのときにも対象に対する働きかけの微弱さのために、[1回の強いウゴキ]読みは出ない。「なでる」は概略「対象物の表面に接触しながら表面上を移動する」というような意味であろうし、「舐める」は「なでる」の概念構造にimplicit instrument(非明示的道具)として[_{Ting} TONGUE]を指定していると考えられる。「事象回数が大量」と[行為の量が大量]の違いは、「事象回数が大量」読みでは事象の素性が[-b, +i]、[行為の量が大量]読みでは[-b, -i]という素性を持つことで区別できる。「対象物への接触」と同時に「接触の様態」を表すことで、運動様態動詞の「はずむ」の場合と同様に、運動様態に焦点を当て、対象物の表面への到達(事象の終結点=境界)を視野の外へ置くことができると考えられる。

3.2.12. 創作変形動詞

- (68) 手が疲れるほど年賀状を書いた。 [目的語が大量]
 (69) 毛糸がなくなるほどセーターを編んだ。 [目的語が大量]
 (70) 数え切れないほど家を建てた。 [目的語が大量]
 (71) 食べきれないほど料理を作った。 [目的語が大量]

ここに属す動詞群は目的語位置名詞句に、Dowty(1991)で提示された、いわゆる“incremental theme”を取る。つまり、事象の終端は目的語位置の対象物の完成によって有界付けられる。したがって、「一着のセーターの大きさが巨大だ」というような読みは得られない*18。いずれにせよ他動詞としての数量詞解釈の一般原則に従うことから、ここでは[目的語が大量]としておく。

3.2.13. 心理動詞

- (72) 思わずとびあがるほど喜んだ。 [非常の程度]

- (73) 顔色が変わるほど怒った。 [非常の程度]
(74) 夜も眠れないほど心配した。 [非常の程度]
(75) 夜トイレに行けないほど怖がった。 [非常の程度]

羽鳥(1997)では、日本語の心理動詞は非対格自動詞的なふるまいをすると考えられている。つまり内的作用状態変化動詞のような内在コントロールを含意している(:6)。(72)-(75)の例で、「ほど」節が[非常の程度]の読みになることは、それを裏付けているとも言える。そして心理動詞が表す心理変化量は数的な計量が困難であり、そのために変動量として[非常の程度]読みとなると考えられる。

3.2.14. 摂取動詞

- (76) 数え切れないほど食べた。 [目的語が大量]
(77) 立てなくなるほど酒を飲んだ。 [目的語が大量]
(78) あごが疲れるほどガムを噛んだ。 [事象回数が大量]
(79) 味がなくなるほどガムを噛んだ。^{*19} [事象回数が大量]

摂取動詞も“incremental theme”を取る。したがって創作変形動詞などと同様、「ほど」節には[目的語が大量]という読みがでる。また、Levin(1993)は chew を verbs of ingesting に含めているが、日本語の「噛む」がそれに相当するかどうかはわからない。ガムには摂取に伴う量の漸進的变化はおそらく含意されないであろうから、これは接触衝撃動詞に属すと考えておいた方がいいかもしれない。Levin(1993)では、bite は verbs of contact by impact の下位分類である swat verbs に属す。つまり日本語の「噛む」は chew というよりも bite の語義に近いといえるだろう。いずれにせよ(78、79)の「噛む」は語彙自身が複数回の動作を含意しているから、有界の事象の集合である[事象回数が大量]という読みが出ると考えられる。

3.2.15. 身体関与動詞

- (80) 数え切れないほどげっぷした。 [事象回数が大量]
(81) 数え切れないほどしゃっくりした。 [事象回数が大量]
(82) 隣の花子が眠れないほどいびきをかいた。 [事象回数が大量]
(83) 数え切れないほど泣いた。 [事象回数が大量]
(84) 枕を濡らすほど泣いた。 [1回の強いウゴキ]
(85) アゴが外れるほど笑った。 [1回の強いウゴキ]

身体関与動詞には、「げっぶする」「いびきをかく」のような物質・音声発生動詞や、「笑う」「泣く」などのような心理変化を伴う動詞も含む。したがって、これらの動詞と共に起した「ほど」節がどのような読みになるかは一様ではないが、発生動詞に関連する動詞であれば、[+b, -i]という動詞の素性から[事象回数が大量]の読みが現れる(物質・音声の発生/消滅が事象の境界となる)。また、(84)(85)のように[1回の強いウゴキ]読みと思われる例も認められるが、「泣く」「笑う」といった動詞の有界性については、明確な断定はできない。時間副詞との共起関係や心理変化といった多くの側面からの考察が必要であろうが、ここでは、指摘するにとどめておく。

3.2.16. 「ほど」構文の解釈と動詞句の有界性

前節まで、動詞の各意味クラスに属すそれぞれの動詞と共に起する「ほど」節がどのような意味解釈を得るのかを観察した。動詞の概念的素性と事象のそれは必ずしも同一ではない。個々の動詞の語彙概念構造はより精密に考察する必要はあるだろうが、「ほど」節の解釈との関連性は確かに認められる。

表3は、動詞の意味クラスと「ほど」節の読みの対応をクラス別にまとめたものである。このような結果は、数量詞と動詞句、および程度副詞と述語との関係からも予測されたことではあったが、主文動詞の概念構造における意味素性、あるいは主文が表す事象の有界性および内部構造が「ほど」節の解釈に関して大きく影響していることは明らかであり、やはり「ほど」節は主文事象との関連から論じられるべきであることが確認されるのである。

各節において論じた動詞および事象の概念素性についてまとめておく。

まず、[主語が大量][目的語が大量]について。これらの解釈は、影山(1993)やMiyagawa(1989)などが指摘した、動詞の項構造と数量詞の指示対象に関する一般原則から演繹的に導かれる典型的な解釈である。換言すれば、この2つの解釈は、解釈原理のシステムにおいてその他のものとは異なるものであるといえる。つまり、[目的語が大量]読みが出るか、[主語が大量]読みが出るかの分岐については、有界性の概念とともに、動詞句の統語構造が大きく関連している。[目的語が大量]読みは他動詞述語文、[主語が大量]読みは非対格自動詞述語文に伴う解釈である。

次に[事象回数が大量]という解釈の特徴について。[事象回数が大量]という読みを許す事象の素性はすべて、動詞の素性[+b, -i]が複数化した[-b, +i]である。つまりPL関数が介在している。「叩く」「噛む」など一部動詞を除けば、これはみな動詞の語彙概念構造に含まれるものではなく、事象解釈の計算上導入されたものである。換言すれば、境界を持たない[-b]の動詞クラス、さらに厳密に言えば、動作の終端を含意しない動詞は[事象回数が大量]という読みを許さない(主体的運動様態動詞、存在出現動詞)。また、消滅動詞は有界[+b, -i]であるが、消滅という非可逆的含意があることから、意味

表3：動詞の意味クラスと「ほど」節の解釈

(○はその解釈を許すもの、△は動詞の個別的な語彙の意味によって許されるもの、▲は名詞句の性質から許されるものをそれぞれ示す)

	数量性(モノ)		数量性(事象)		情態性 非常の 程度	程度性 1回の強い ウギキ
	目的語が 大量	主語が 大量	事象回数が 大量	行為の量が 大量		
所有変化動詞	○					
創作変形動詞	○					
摂取動詞	○					
消滅動詞		○				
生来的方向性動詞		○	▲			
存在出現動詞		○		△▲		
接触動詞			○			
外的作用状態変化動詞			○			
身体関与動詞			○			△
運動様態動詞			○			△
接触衝撃動詞			○			△
主体的運動様態動詞			▲	○		△
内的作用状態変化動詞		△			○	
心理動詞			△		○	

的に連続的多回的事象解釈を許さない。そして「変動量」を表す、つまり個別的な計量が不可能な動詞クラス(内的作用状態変化動詞、心理動詞)も[事象回数が大量]読みを許さない。[事象回数が大量]という読みは「ほど」節の頻度数量詞的機能、つまり事象を個別的に計量する機能による解釈であるから、「変動量」を表す動詞はこれを許さないのである。[事象回数が大量]の読みを持つ事象の素性は動詞の概念構造にPL関数が外づけられている。その点で、この読みはその他の読みとはその性質を異にする。外的作用状態変化動詞の例でもわかるように、PL関数を導入することで限界動詞と数量詞の衝突を回避しようとして得られた二次的な解釈であるともいえる。だからこそ、本来の方向性を持つ動詞や知覚動詞などにおいて、主文主語の名詞句の内部構造[-i]が原因で[主語/目的語が大量]という読みを許さない場合において、PL関数の導入による[事象回数が大量]が出るのである。なぜ、動作の終端を含まない動詞クラスが[事象回数が大

量]の読みを持たないかという点、それは[-b]の素性を持つ要素は複数化できないためである。つまり非有界的要素にはPL関数の導入が行えないので[事象回数が大量]読みが出ないのである。

[行為の量が大量]について。この読みは主に、非有界的事象を表す動詞クラスに現れる。主体的運動様態動詞や Levin(1993)が存在動詞クラスに含めた「待つ」などである。統語的には非能格自動詞文である。そして、そのとき主語の解釈が[-b, +i]を許さないという条件も伴う。また、「いる」など一部の存在動詞がこの主語の数性の条件を満たすとき、存在する時間に関して[行為の量が大量]読みが出ることもある。

また、[1回の強いウゴキ]読みは、運動様態動詞・主体的運動様態動詞・接触衝撃動詞・身体関与動詞クラスの一部の動詞にのみ認められる。共通して見られる意味的特徴は、接触衝撃動詞に代表されるように、語彙の意味の中に運動様態のあり方、およびそれに伴う状態変化を含意しない程度の働きかけ性が認められることである。これにより、動詞が表わす一回の動作の運動様態を抽出することが可能になる。そして、そうした動作の様態の側面の焦点化によって、有界的事象として要求される多回の解釈への計算は回避され、事象全体の有界性が後景化すると考えられる。[事象回数が大量]読みが、事象が有界付けられることから導かれる計算によるものとするれば、[1回の強いウゴキ]はそうした事象の有界性よりもむしろ、当該の事象における様態をとりあげたものであり、その他の解釈の計算とはいささか異なる要件を持つものといえる。

4. まとめ

本稿では、「ほど」構文の解釈可能性がどのような要件のもとに確定するかという問題について、主文動詞クラスおよび主文事象の有界性との関連から考察してきた。その結果、明らかになったことは、以下の諸点である。

- I : 「ほど」節の解釈は主文動詞の意味クラスごとに持つ有界性と内部構造に関する素性と関連し、その読みは動詞および主文事象の概念素性の計算から導出される。
- II : 「ほど」節の各解釈は次のような事象の素性または要件に従う。
 - (i) [目的語が大量] : 他動詞で、その直接目的語が“Incremental Theme”であるか [-b, +i]の解釈を許すとき。
 - (ii) [主語が大量] : 非対格自動詞文で、主語が[-b, +i]の解釈を許すとき。
 - (iii) [事象回数が大量] : 事象の個別数量的計量。PL関数導入による[+b, -i]の [-b, +i]への変換。
 - (iv) [行為の量が大量] : 事象の内容数量的計量。自動詞文で、非有界的事象を表すとき。主語が[-b, +i]を許さないとき。

(v) [非常の程度]: 事象の非加算的計量。状態変化事象。

(vi) [1回の強いウゴキ]: 運動様態、およびそれに伴う、主体・対象物の状態変化を伴わない程度の働きかけ性を含意する動詞クラスの運動様態の前景化・事象の境界の後景化。

III: [主語が大量][目的語が大量]などが動詞の項構造関与してもたらされる解釈であるという点で、その他の解釈とは異なるといえる。また、[事象回数が大量]読みは、動詞と名詞句あるいは「ほど」節の意味制約の衝突を回避するための解釈規則を適用することによって導出されることがある。[事象回数が大量]という読みは、終端を持つ事象の複数化によって得られるという点で、その他の解釈とは異質な性質を持つ。

本稿が取り上げた「ほど」構文は、これまでほとんど問題にされてこなかった構文であるが、実際にその解釈を考察してみると、実に興味深い特徴を有していることがわかる。本稿で考察した主文の有界性という観点は、「ほど」構文の性質の一端を取り上げたにすぎない。よって、本稿では十分に検討できなかった課題も多い。「ほど」のその他の用法や、「いちじるしく多い(少ない)」という含意がどこから得られるのか、という問題、さらには同様の構文を持つとみられる「くらい」「だけ」「まで」などにも考察の範囲を広げる必要があるだろう。それらについては今後、さらに考察を進めたい。

また、「ほど」節が一般の程度副詞に類似したふるまいをみせることや、一方で様態副詞的解釈を得ることなどから、副詞的修飾成分としての性格についても考えていかなければなるまい。特に、程度副詞の量副詞的用法と、その用法的環境の位相については副詞研究の分野においても進められており、理論的方向性としては、本稿の結論がそれに寄与できると考えられる。

注

*1 奥津(1980)は程度の形式副詞「ほど」節の用法として、[非常の程度]、[通常の程度]、[同程度]、そして[比例]を挙げている。そして[比例]を除いたその他の3用法は程度副詞として「その述語の表す事柄の程度を示す(:150)」とする。また本稿であつかう構文は[非常の程度]に限定する。その理由は、形式副詞の「ほど」の用法はおおむね、[非常の程度]に偏っており、[通常の程度]および[同程度]の両用法については形式名詞としての用法または否定辞のスコープとの関連からさらに検討する必要があると思われるためである。しかし、その問題については別稿に譲りたい。

*2 形式副詞構文が、どのような統語構造を持つかという問題は今後明らかにすべき問題である。それは日本語数量詞の生成位置に関連する問題であると思われるが、現時点ではオープンにしておきたい。

*3 こうした形式副詞「ほど」の派生形式については奥津(1980b、1986)、韓国語との対照で

は奥津・井本(1998)を参照されたい。

- *4 以下、「ほど」構文の解釈にはすべて「当該の要素の数量／程度が著しい」という含意がある。この含意がどこからもたらされるかについては、いくつかの仮説がある。ひとつは、「ほど」自身が語彙的に持っているというもので、これは「ほど」の類義語である漢字語「程度」の意味的相違から説明される(「程度」は「ほど」構文において、「ほど」とは置換できない。[*おなかを壊す程度アイスクリームを食べた])。もうひとつは、形式名詞としての用法における意味的相違から、「ほど」構文のような構造をもつときの、いわば「構文の意味(constructural meaning)」であるという仮説である。これは Rappaport Hovav and Levin (1996)や Goldberg (1995)で展開された template (枠組)や construction から与えられる意味という概念を想起させる。これにより、一般的に概数を表す形式名詞とされる「10冊ほどの本」と「抱えきれないほどの本」との含意の違いが説明されるかもしれない。いずれにせよ、「ほど」構文の意味解釈に関する大きな問題であるといえるが、現時点では、結論には至っていない。
- *5 ここでいう「繰り返し」とは、いわゆる temporal localization (時間的局所限定性)を持つ解釈である。したがって習慣的反复性や「毎日学校へ通う」に伴う時間的配分を含意する解釈とは異なる。
- *6 いわゆる事態名詞句を計量対象とする「ほど」節が[事象回数が大量]読みを伴うことがあるように(「伊豆半島で数えきれないほど地震があった」)、指示される名詞句の性質によっては[非常の程度]および[1回の強いウゴキ]が出ることがある(「その場で立ち上がれなくなるほどの疲労がたまった」「あばら骨が折れるほどの蹴りを受けた」)。しかし、これらは名詞句の性質あるいは「ほど」構文の派生形式である名詞型構文によるものと考えられ、その精緻な考察は別稿に譲ることにする。
- *7 Jackendoff のこの概念は、他の術語で言うならば、数の概念における定／不定の対立であるといえる。
- *8 (15)に示した概念構造は、当該論文において、初期的な構造として示されたものであり、そこでは次元性(dimensionality)と方向性(directionality)などが導入されたより精密な概念構造も示されているが、それら諸概念が本稿での議論に直接は関連しないこと、(15)の構造でも有界性という概念の適用例としては充分であることから、ここではそれを採用した。
- *9 「[5トン]は「殺した豚」を一まとまりとしてまるごと計量するに足る数量だから適格なのである。(中略)つまり、“述部に限定された先行詞が表すモノについての個体数量がある程度多い”という読みが可能な場合、内容数量詞は「殺す」と共起できるのである。」(北原 1996:37)
- *10 なお、(19a)においても、事象回数は複数であると解釈される。それは「ハワイへ行く」という事象の素性[+b, -i]との整合のために複数化が適用されているからである。したがって、事象回数という点では(19a)も(19b)も複数解釈である。
- *11 したがって、本節で取り上げていない動詞クラスについても検討する必要はある。しかし、本稿の段階では、Levin(1993)の動詞クラスを日本語の動詞クラスにどこまで適用できるかという問題も残っているし、それは本稿の考察の及ぶところではない。よって、この問題については今後の研究に譲る。
- *12 「(28)の「泳ぐ」には手足の運動が含まれているから[-b, +i]ではないか」という話者がいるかもしれない。しかしそれは文の解釈から適切ではないと思われる。[-b, +i]という素性

- を持つならば、「ほど」節のもたらす計算によって「事象回数が大量」という読みが出るはずであるが、それならば、「手足の運動回数が大量」という読みを伴うはずである。それは「太郎は60回泳いだ」において、「手足を60回動かした」という意味を持たないと同様である。したがって、「泳ぐ」は「回転する」など運動様態動詞と違い、その内部構造は[-i]であると考えの方がよい。物理的な運動としての内部構造を含んでいたとしても、それは文脈上の視点からは捨象されていると考えられる。
- *13 (31)の事象は「ホノルルマラソンで」という付加詞句から、有界の事象であるとも判断されるが、それが「主語が大量」という読みを直接的に導出するわけではない。
- *14 VP-quantifierと事象の意味的制約についてはIshii (1998)を参照されたい。そこでの指摘は「ほど」構文の意味解釈にも通用する。
- *15 奥津(1996)では、「咲く」は「発生动詞」に分類されている。
- *16 ただし、接触衝撃動詞は衝撃に伴う状態変化を含意しない。つまり金水(1995)や北原(1996)のいう限界動詞ではないので、外的作用状態変化動詞のような複数回の事象という読みは強制されない。
- *17 対象に対する働きかけが含意されないことは、接触衝撃動詞が目的語をヲ格で標示するのに対して、接触動詞では二格で標示するという違いからも示唆される。またRappaport Hovav and Levin (1996)で取り上げられている sweep, wipe といった verbs of surface contact (表面接触動詞)が、floorなどを直接目的語として取ることができる(Kelly swept the floor.)のに対して、*Kelly swept the leaves. が不適格になるという現象も対象の働きかけという点で、並行的な特徴であるといえる。
- *18 厳密に言えば、事象の回数と対象物の数量と総計としての行為量はすべて同期的に増加する。こうした事象構造における事象・対象物・時間の同期的推移はJackendoff(1996)の構造保持束縛関係理論(structure-preserving binding relation)によって、説明される。構造保持束縛関係の「ほど」構文への適用については井本(1999a)を参照されたい。
- *19 (79)に関して、一部の話者から「1回強く噛めば味がなくなるようなガムがあるとすれば、これは「1回の強いウゴキ」と解釈できるのではないか」という指摘を受けた。もちろん、そのような環境を整えれば可能である。しかし、むしろ重要なのは、「1回の強いウゴキ」読みが可能な動詞は「噛む」を含め、衝撃度・働きかけ性に関して共通の意味特徴をもっていること、そして動詞「噛む」が、回数性に関しては二義的であるということである。したがって、その指摘が示唆するものは、本稿の議論の反証とはならず、むしろ現象的にはその傍証となろう。

参考文献

- 井本亮(1999a)「『ほど』構文の意味解釈——数量詞の意味解釈と事象構造の観点から——」
神田外語大学修士論文
- 井本亮(1999b)「『ほど』の数量詞的機能——「VするほどVした」構文の意味解釈から——」
平成11年度国語学会春季大会研究発表要旨集 60-67
- 奥津敬一郎(1975b)「程度の形式副詞」『東京都立大学人文学報』第103号 東京都立大学 86-97
- 奥津敬一郎(1980a)「『ホド』——程度の形式副詞——」『日本語教育』第41号 149-168

- 奥津敬一郎(1980b)「*ダ*型文と前提の型—ホド*ダ*文を例として—」『日本語研究』第3号 東京都立大学日本語研究会
- 奥津敬一郎・井本亮(1998)「日本語と韓国語の形式副詞——非常の程度を中心に——」『日本語・韓国語対照研究三題』第1章 COE 形成基礎研究費(課題番号 08CE1001) 研究報告(2) 418-428
- 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 影山太郎(1992)「統語的非対格性と語彙概念構造」『言語理論と日本語教育の相互活性化』平成3年度科学研究補助金(総合研究A)研究成果報告書 井上和子他 67-86
- 川端善明(1967)「数・量の副詞」京都大学『国語国文』36-10 1-27
- 北原博雄(1994)「数量詞の連用修飾機能——数量詞と先行詞の関係——」『文芸研究』第137号 1-10
- 北原博雄(1996)「連用用法における個体と内容数量詞」『国語学』186 29-42
- 北原博雄(1997)「連用用法の数量詞があらわす数量について——非対格性の仮説からの検討——」月刊『言語』26-3 大修館 98-103
- 金水敏(1995)「いわゆる『進行態』について」『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15 『日本語動詞のアスペクト』1976 むぎ書房に再録
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐる」『副用語の研究』明治書院
- 国立国語研究所(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 佐野由紀子(1998)「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3 7-22
- 鈴木和子(1997)「Event Structure から見た「たくさん」の解釈」神田外語大学修士論文
- 仁田義雄(1983)「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10
- 羽鳥百合子(1997)「心理動詞の使役性——日英仏の対照研究——」川村女子学園研究紀要 第8巻 第1号 1-17
- 森重敏(1958)「程度量副詞の設定」京都大学『国語国文』27-2 34-55
- 森山卓郎(1985)「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』2-10 60-65
- Dowty, David. (1991) Thematic Proto-Roles and Argument Selection. *Language* vol.67, No.3. 547-619
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Constructional Grammar Approach to Argument Structure*. The University of Chicago Press.
- Ishii, Yasuo. (1998) Floating Quantifiers in Japanese: NP Quantifiers, VP Quantifiers, or Both? COE 形成基礎研究費(課題番号 08CE1001) 研究報告(2) 149-171
- Jackendoff, R.S. (1983) *Semantics and Cognition*. Cambridge, Mass. MIT Press.
- Jackendoff, R.S. (1987) The Status of Thematic Relations in Linguistic Theory. *Linguistic Inquiry* 18, 369-411
- Jackendoff, R.S. (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, Mass. MIT Press.
- Jackendoff, R.S. (1992) Parts and Boundaries. *Lexical & Conceptual Semantics*. ed by Beth Levin and Steven Pinker. Blackwell. 9-45
- Jackendoff, R.S. (1996) The Proper Treatment of Measuring Out, Telicity, and Perhaps Even Quan-

tification in English. *Natural Language and Linguistic Theory* 14. Kluwer Academic Publishers. 305-354

Levin, Beth. (1993) *English Verbs Classes and Alternations*. The University of Chicago Press.

Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.

Malka Rappaport Hovav, and Levin, Beth. (1996) Building Verb Meanings.ms.A Paper presented at a TACL meeting, Tokyo Metropolitan University.

Miyagawa, Shigeru. (1989) *Structure and Case Marking in Japanese: Syntax and Semantics* 22. Academic Press.

Tenny, Carol. (1994) Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface. *Studies in Linguistics and Philosophy* 52. Kluwer Academic Publishers.

Vendler, Zeno. (1976) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.

(1999年6月3日 受理)